

シンポジウム

シンポジウム10

不整脈の新しい治療法

座長:

住友 直方 (埼玉医科大学国際医療センター)

宮崎 文 (国立循環器病研究センター)

Fri. Jul 17, 2015 4:20 PM - 5:50 PM 第1会場 (1F ペガサス A)

II-S10-01~II-S10-04

所属正式名称: 住友直方(埼玉医科大学国際医療センター 小児心臓科)、宮崎文(国立循環器病研究センター 小児循環器科)

[II-S10-04]遺伝性不整脈に対する高周波カテテルアブレーション

○牛ノ濱 大也 (福岡市立こども病院 小児科 (循環器))

高周波カテテルアブレーション RFCAは様々な不整脈疾患に適応されており、一部の遺伝性不整脈 (Brugada症候群、カテコラミン誘発性多源性心室頻拍 CPVT、特発性心室細動など) に対する有効症例も報告されるようになってきた。当院では遺伝性不整脈患者に対して RFCAを施行した3例を経験している。当院の経験を含め文献的考察を加え報告する。症例1: 12歳男子。学校の水泳授業中に心肺停止で発見され、救急隊の除細動により救命された。救命後のモニター心電図で多源性非持続性心室頻拍 PNSVTが観察されていた。当院紹介後は運動負荷試験、カテコラミン負荷試験でも VPC二段脈が記録されるのみであった。この VPCを標的に RFCAを行い VPCは消失し、一時的に有効であった。その後リアノジン遺伝子の異常が判明しフレカイニド、カルベジロールの内服を継続している。症例2: 15歳男子。自宅で失神し救急隊の除細動で救命されている。運動負荷試験で PNSVTが誘発され、カテコラミン負荷で二方向性 VTが生じ CPVTと診断した。カテコラミン負荷中 VPCのタイミングと一致する T波終了後 exit blockを伴う大きな拡張期電位が得られ同部位に対して RFCAをしたが十分な効果は得られなかった。フレカイニド、カルベジロールの内服を継続し症状は認めていない。症例3: 12歳女児。テレビを見ている際に失神し、Holter心電図で300bpm程度の単形性 VTを認め精査加療を目的に紹介となる。安静時12誘導心電図では、正常洞調律、72bpm、QTc0.443であった。入院中 propranolol内服下でも非持続性 VTを繰り返した。一部 Torsades de pointesが記録されていた。RFCAを行い単形性 VTは消失した。脱力症状があり LQTSを疑い遺伝子解析を行ったところ既報の HERG遺伝子の変異が検出された。トリガーとなる VPCに対する RFCAは、遺伝性不整脈に対しても有効である可能性がある。